琉球大学学術リポジトリ
University of the Ryukyus Repository

Title	Lymphatic vessel involvement predictive for lymph node metastasis and important prognostic factor in endometrial cancer(Abstract_論文要旨)
Author(s)	Wakayama, Akihiko
Citation	International Journal of Clinical Oncology, 2017: 1-7
Issue Date	2017-12-23
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/39266
Rights	

国立大学法人
琉球大学
University of the Ryukyus

（別紙様式第３号）

論　文　要　旨

論　文　題　目

Lymphatic vessel involvement predictive for lymph node metastasis and important prognostic factor in endometrial cancer

(子宮体癌におけるリンパ管侵襲･静脈侵襲の個別評価の臨床病理学的意義)

氏　名　若山 明彦　印

子宮体癌は罹患率が最も高い婦人科癌であり、近年本邦でも明らかに増加している。多くの症例は子宮体部に病変が限局した進行期I期の状態で発見され、5年生存率は約90%と予後良好である。再発高危険群に対する術後の補助療法の適応は術後の病理組織診断により行うが、腫瘍細胞の脈管侵襲は重要な再発危険因子の一つとされている。婦人科癌において、子宮体癌に限らず脈管侵襲の評価は、H&E染色により静脈浸潤とリンパ管浸潤を区別することなく行われている。ところが他癌種の多くでは、静脈、リンパ管浸潤を個々に評価し、それぞれの予後因子としての意義や臨床的有用性が示されている。そこで本研究では、子宮体癌においてリンパ管および静脈浸潤を個別評価し、それぞれの臨床的意義および予後に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

2006年から2013年までに、当科で手術を施行した189例の子宮体癌類内膜腺癌患者を対象とし、

本研究を行った。静脈浸潤の評価は血管の弾性線維に陽性染色を示すビクトリアブルーH&E染色を、また、リンパ管浸潤の評価はD2-40による免疫組織化学染色を用いて行った。

189例の年齢中央値は57歳（25-84歳）であった。手術進行期はI期143例、II期11例、III期25例、IV期10例、腫瘍分化度は高分化型腺癌が110例であった。

脈管侵襲に関しては、静脈浸潤のみが15例(7.9%)、リンパ管浸潤のみが34例(18.0%)、両浸潤陽性が21例(11.1%)に認められた。両浸潤陰性は119例(63.0%)であった。進行癌、低分化度腫瘍、および深い子宮筋層浸潤例で、リンパ管浸潤あるいは静脈浸潤が有意に高頻度であった。リンパ管浸潤例では所属リンパ節転移、静脈浸潤例では卵巣転移が有意に高率であった。リンパ管浸潤例やリンパ管・静脈両浸潤例では遠隔転移が高率に認められた。また再発部位に関しては、リンパ管浸潤例ではリンパ節再発が、リンパ管・静脈両浸潤例では遠隔臓

器再発が有意に高頻度であった。さらに多変量解析でリンパ管浸潤はリンパ節転移のリスク因子、かつ独立した予後因子の一つであり、リンパ管浸潤例は有意に予後不良であった。

本研究により、子宮体癌症例の脈管侵襲判定において、静脈浸潤とリンパ管浸潤を個別に評価することにより、リンパ節転移の予測、再発部位、さらに予後情報に関する有用な情報がもたらされることが示された。